

[特別活動]

集団の一員としての実感と自覚を高める児童会活動の取組

－縦割り班活動を中核とした児童集会を通して－

佐野あさひ*

1 主題設定の理由

学習指導要領の特別活動改訂の要点において、「年齢が異なる児童の人間関係を築き、楽しい生活をつくるなど自分たちの学校生活の向上を目指して、進んで話し合い、協力して実現しようとする自主的、実践的な態度の育成」¹⁾の重視をあげている。その背景に、異年齢集団で遊び、切磋琢磨する機会が減少している今、年上の子どもが年下の子どもを自然と思いやり、その姿を見て年下の子どもが年上の子どもを慕うといった関係が希薄化してきている現状がある。

矢野は、「遊びを中心とする子ども集団の行為が、自主性を育んできた。」²⁾と述べている。遊びを中心とする集団が構成されにくくなった今、現場は、意図的に異学年集団をつくり自主性を育む機会をつくろうと取組を行っている。

前任校では、縦割り班活動を中核とした児童会活動に取り組んできた。私は、児童会活動を通して、子どもの自主性を育もうと、年上の子どもたちがリーダーシップを発揮することを期待し、異学年交流の場を設定するよう努めてきた。しかし、児童会活動への参加意欲や目的意識の低い下級生を相手にして、なかなかリーダーシップを発揮できないでいる高学年を多く見てきた。その高学年を助けるために、それまでとってきた方法は、下級生に「上級生の言うことを聞かせる」ということだけだった。

滝は、「『リーダー性』の問題は、表に現れた部分よりもその背景や土台の方にあると考え、集団や社会の一員としての実感や自覚といったものこそ問題にすべきだ」³⁾と述べている。また、子どもに集団の一員としての自覚を高めるためには、「自分が属する集団や社会に対して愛着を感じることを、さらには自分の好きな集団や社会に対して貢献したいと感じるようになること、貢献できることを誇りと感じるようになることが必要」³⁾とも述べている。これは、高学年児童はもちろん、これまで、あまり目を向けてこなかった低学年や中学年児童にも十分に必要だと考える。

南雲は、児童の自主的・実践的な態度を育むために、代表委員会のもち方を工夫し、低学年から高学年による集団における建設的な話し合いが有効であることを証明した。私は、全校児童の集団への所属意識をさらに高めるためには、代表委員会よりも活躍の場がどの子にも保証される縦割り活動のあり方を工夫することで、児童の自主的・実践的態度がより育まれると感じた。低・中学年が、縦割り班や児童会組織に対して愛着を感じ、この集団に対して貢献したいという気持ちをもつことができれば、高学年の力強いフォロアーになることは間違いないはずである。

そこで、本研究では、高学年だけでなく、低学年や中学年が児童会活動に対して関心をもったり理解をしたりすることが、集団の一員としての実感や自覚を高め、自分たちの学校生活の向上を目指して、進んで話し合い、協力して実現しようとする異学年集団を育成することにつながると考え、本主題を設定した。

2 研究の目的

本研究は、低学年や中学年が主体的に取り組むことができる縦割り班活動を中核とした児童会活動を仕組むことで、全校児童が、集団に愛着を感じ、楽しい学校を自分たちでつくることのできるという実感が高められることを実践を通して明らかにする。

3 研究の内容及び方法

- (1) 児童会キャラクターの考案
- (2) 児童集会の見直し

* 上越市立高田西小学校

上記活動の成果を、運営委員会児童や活動への参加児童の行動観察や振り返りカードの記述、事後アンケートの結果、教職員の事後アンケートの結果から検証する。

4 実践の概要と考察

(1) 児童会キャラクターの考案

2年前から、PTA役員が、様々な学校行事に親子のキャラクターを登場させていた。子どもたちは、行事の度に出場し、メッセージを伝えるキャラクターに高い関心を寄せた。このキャラクターの登場は、活動の盛り上がりだけでなく、話に対する子どもたちの集中度を高めていた。

そこで、児童会でもキャラクターを誕生させ、年間を通して様々な場面で全校児童に働きかけをすることで、児童自らが仲間話を聞き、皆で協力をする雰囲気を作り上げることができるのではないかと考えた。学校のために頑張るキャラクターの存在は、下級生のあこがれとなり、「役に立ちたい」という気持ちが高めることにつながるのではないかと考えたのである。運営委員会は、学校名と「大好き」と「ボーイズ」の頭文字をとった「ODB」というキャラクターを誕生させた。(写真1)「ODB」は、年間を通して様々な活動に登場し、「学校が楽しく、仲良く過ごすことができるようにみんなができること」を全校児童に話した。「ODB」が年間に行った活動は、次の通りである。



写真1：ODB

4月	一年生を迎える会に登場する。一年間を通して、「楽しく、みんなが仲良く過ごすことができる学校をみんなと一緒につくる」ことを目的に誕生したことを全校児童に伝える。
5月	運動会に登場する。借人競争で低学年や中学年と一緒に競技に参加する。「行事は楽しく、一生懸命に取り組もう」という思いを全校児童に伝える。
7月	七夕飾り作りに登場する。短冊に自分の個人的な願いを書くのではなく、「どんな学校になって欲しいか」「どんな言葉やどんな人があふれる学校になって欲しいか」を短冊に書くよう全校に呼びかける。
10月	文化祭の作品鑑賞の目的やルールを説明する。
12月	児童会行事「チャレンジオリンピック」の目的やルールを説明する。
3月	引退記者会見で、一年間の活動を振り返り、学校の素晴らしさや全校の変容や今後の願いを伝える。

一年生を迎える会に登場した際には、日新しさから、活動が盛り上がった。運動会の種目に登場した際には、低学年や中学年が身近に学校のヒーローである「ODB」と触れ合うことができたことで、学校行事に楽しみを見出した。その後の活動でも「ODB」を幾度となく登場させたが、行事が盛り上がるだけでなく、低学年や中学年が、「ODB」が話す活動目的や決まりを静かに聞こうとするようになった。さらに、活動中には、縦割り班の仲間と協力をしたり、決まりを守って行動をしようとしたりする様子も見られるようになった。また、活動日だけに登場するのではなく、昼の放送を使って、活動日より少し前から、活動の目的や決まりを話したり、給食の時間に各教室を回って説明をしたりした。これにより、低学年や中学年は縦割り班活動や児童会活動に期待感をもって参加することができた。「ODB」を中心とした縦割り班活動や児童会活動の展開によって、運営委員会は全校児童の変容を下図1のように実感していた。



写真2：運動会の低・中学年の競技に参加

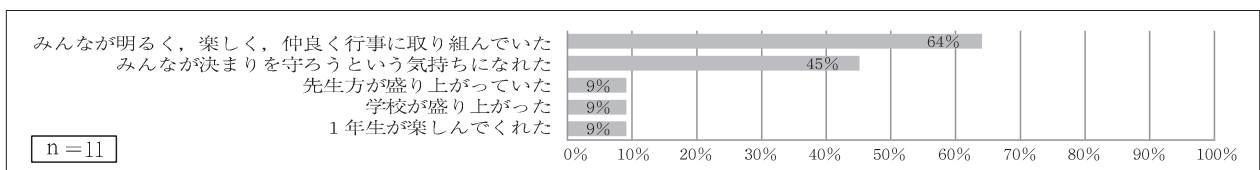


図1 ODBを誕生させてよかったと思うわけ (運営委員による自由記述)

決まりを守ろうと、全校児童が意識するようになっただけでなく、一人一人が児童会活動に楽しみを見出すようになったと児童会行事の企画者自身が感じていることが分かる。

また、教職員は、「ODB」を中心とした縦割り班活動や児童会活動の展開による全校児童の変容を下図2のように評価した。

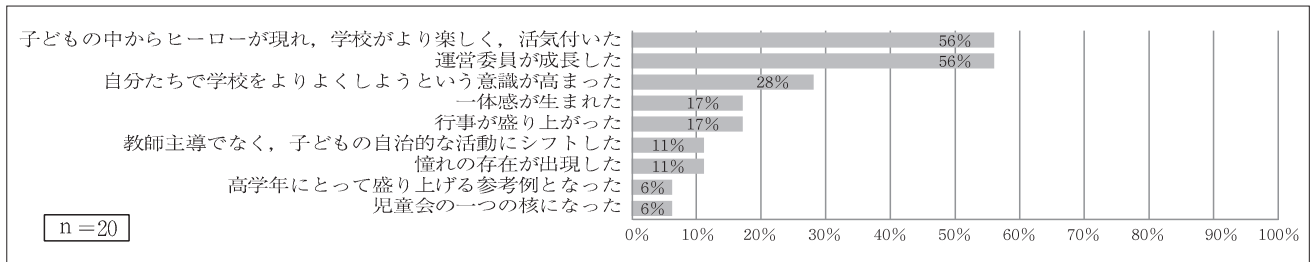


図2 ODBが学校に誕生してよかったと思うわけ（教職員による自由記述）

高学年の担任だけでなく、低・中学年の担任が自学級の子どもが縦割り班活動への参加意識を高くもったことを評価していることが分かる。子どもたちがまとまり、縦割り班活動を楽しみ、学校全体が活気付いたと実感し評価した職員が現れたことが分かる。

そして、全校児童が、「ODB」を中心とした縦割り班活動や児童会活動の展開による効果を下図3のように評価した。

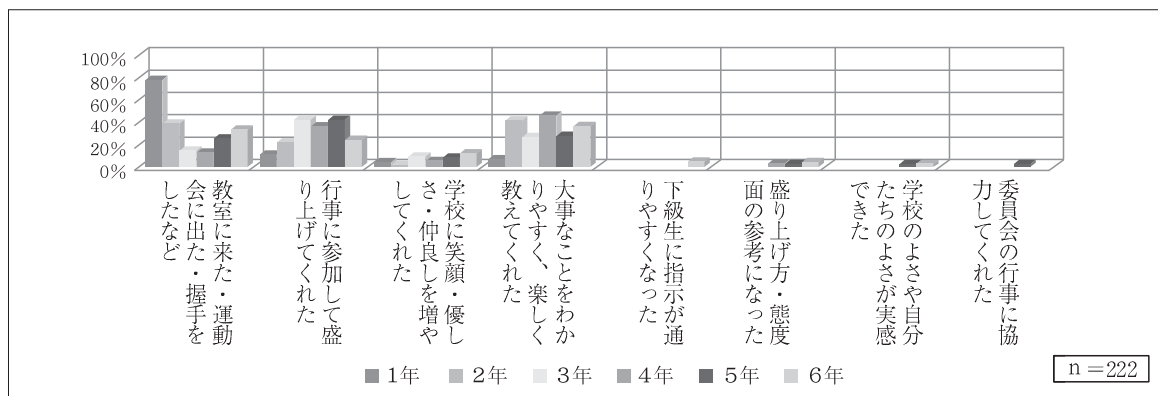


図3 ODBが学校に誕生してよかったと思うわけ（全校児童による自由記述）

低・中学年にとって、「ODB」は行事を盛り上げたり、一緒に活動をしたりしてくれる身近な存在と感じていることが表から見て取ることができる。また、活動目的や決まりなどを教えてくれる人として「ODB」のことを肯定的に見ていることが分かる。低・中学年の児童にとって「ODB」の存在は「あこがれ」となり、「一緒に盛り上がりたい」「役に立ちたい」という集団に対する貢献の感情につながっていったと判断することができる。また、6年生の評価内容からも、自分たちの仲間が頑張っていることに共感し、協力したいという集団に対する貢献の感情が生まれたことが分かる。

「ODB」を中心として活動を展開した運営委員会の取組は、下記の点で効果があった。

- ① 決まりを教えてくれる人のことを低・中学年が身近に感じた。
- ② 決まりや活動目的が分かりやすいと低・中学年が実感できた。
- ③ 決まりを理解して協力することが、楽しさにつながることを実感し、集団に貢献しようとする態度につながった。

ヒーローという分かりやすいキャラクターが、継続して全校児童に関わり続けたことで、低学年や中学年の児童会への関心が高まり、積極的な参加意識と自分も役に立ちたいという所属意識を高めることにつながったと考える。

(2) 児童集会の見直し

① 縦割り班の変容を確認する児童集会

これまで、運営委員会が主体となる児童集会が学期に一回あった。「一年生を迎える会」「チャレンジオリンピック」「卒業を祝うプロジェクト」の3つである。3つの集会には、縦割り班で集まり交流する活動が仕組みされていた。しかし、いずれの活動にも関連性がなく、ただ集まって交流を深めるという内容となっていた。学期末に、「友達のよいところを見つけて伝え合う」という場面が設けられているものの、低学年や中学年のほとんどは、誰がどんなことをしていたかを思い出せなかった。

そこで、一年間の児童集会を次のように位置付けた。

活動	集会の位置付け
一年生を迎える会	縦割り班の顔合わせの場にする。自己紹介後、一年間通した班のめあて（目指す姿と具現のための具体的な言動）を確認する。
チャレンジオリンピック	1, 2学期の縦割り班活動の様子から、どのような活動が必要かを運営委員会で考え、内容を決定する。活動において、自分の班の変容を班ごとに評価する。
卒業を祝うプロジェクト	縦割り班の解散の場にする。1年間の振り返りの時間を取り、班の成長したこと、よかったことを確認する。

班のめあてを立てる（年度初め）→班のめあての達成状況や今後の課題を確認する（年度途中）→班のめあての到達度やそう考えた根拠を振り返る（年度終わり）活動を集会の前や後に組み込み、一年間の縦割り班活動を子ども自身が確認する流れをつくった。これにより、子どもたち自身がグループの変容に気付くことができるようにした。

「チャレンジオリンピック」を終えて、参加者である6年生は振り返りシートに、次のように自分の縦割り班のことを振り返った。

- 私の班は、全部のミッションを達成することはできなかったけれど、十分協力して活動できたと思う。一番協力性を発揮できたのは、「フラフープ通し」だった。みんなが近くにおいて協力できるものだったからだ。私は、自分から行動をすることができないタイプだが、この班の人たちは、自分が何とかしようとする気持ちが高いので、これからの活動もうまくやってくれると思う。これまでの、チャレンジオリンピックは、ただ動き回るだけで、班のよさというものに気付くことはできなかった。しかし、今回のような活動に変わったことで、この班のよさが少しずつ見つかってきた。この班のよさは、人の様子に気付いて動こうとするところだ。私も見習いたいと思った。（A子）
- 「ミラクルマット」と「ジェスチャーゲーム」が心に残った。どちらも、チームワークが発揮できていたからだ。ミラクルマットでは、高学年が低学年を助けたり、失敗したことを中学年がカバーしたりする場面がたくさんあった。「ジェスチャーゲーム」では、私が答えなくてはならないお題のヒントを下学年が必死になって伝えてくれる様子に感動した。みんな、グループのために自分から進んで助けようとしていて、この班はいいなと思った。（B子）

一つの集会の様子を振り返るだけでなく、1年間の縦割り班活動を終えて、C子は次のように自分を振り返った。

今まで、私の中に描かれていた6年生像は、常にリーダーとして自分たちを引っ張っていついてくれて、分からないことを聞くと何でも教えてくれるあこがれのような存在だった。5年生の冬、自分がそのような6年になれるのかとても心配になった。しかし、縦割り班活動を通して、リーダーであることを不安に思う必要がないと考えるようになった。私は、意見をまとめたり、グループをまとめて引っ張ったりすることはあまり得意ではない。でも、グループの和にとけ込んで、誰とでもコミュニケーションを取ることは得意だということに気付いた。それが自分の得意なことだと気付いた。自分らしいリーダーを心がけたことで、とても楽しい縦割り班活動をすることができた。リーダーをやってよかったと思った。仕事が終わった後の達成感がとても好きになった。

児童集会において、班のめあてやめあての達成度・課題点を確認することを子どもたちが繰り返し経験したことで、リーダーである6年生が、中学年や低学年の頑張りや班の変容に気付き、伝えようとする態度を見せるようになったと考える。さらに、自分自身の班員に対するかかわり方の変容にも気付き、班員だけでなく自分自身も集団の中で頑張ったことを誇りに思うことができるようになっていった。

また、運営委員会の子どもたちも、縦割り班での活動がうまくいっているか否かという観点から児童集会の内容を見直すようになった。6年生ばかりが引っ張る活動の仕方では、全学年が参加意識をもつことのできる異学年交流を阻むことに気付いた。また、6年生の心理的負担を増大させることにも気付いた。その結果、中学年や下学年が活躍できる活動が用意され、6年生が「ありがたい」「助かった」「いい集団になった」といった班を誇りに思う気持ちを縦割り班活動で実感できるようになっていったと考える。

② 縦割り班のかかわり方を確認する振り返りの場

これまででは、縦割り班活動後の振り返りを行っていたのは学期末だった。班員への感謝の気持ちや尊敬の気持ちを「宝物カード」なるもので伝えたり、自分の縦割り班活動への参加態度を自己評価という形で振り返ったりしてきた。しかし、時間を経た活動を思い出して書くメッセージの内容は、どれも同じような内容となり形骸化されていた。また、班の課題点を互いに共有したり、目指す方向を確認したりする振り返りにはなっていなかった。

そこで、縦割り班活動の振り返りの方法を右のように変えた。活動後だけではなく、活動前に班のめあての確認をしてから活動に入るようにすれば、低学年や中学年が班の一員として何を心がけなくてはならないかが意識しやすくなると考えた。2学期に行った「チャレンジオリンピック」の反省会の場面で、6年生のリーダーが、次のように班員に語った。

〈班での振り返りの方法〉

- ・班で一枚のカードを書く。
- ・よりよいグループをつくるための具体的な行動めあてを書く
- ・活動前に、班のめあてを確認する。
- ・活動後に、だれのどんな行動がよかったか、うれしかったかを話して振り返る。
- ・ホールに全グループ分のカードを掲示する。

○今日の活動を通して、私の班は、とてもチームワークがあると思った。どの人にも、褒めたり励ましたりする言葉がたくさんあったから。4年生がしっかりしていてくれて、とても助かった。縄跳びでは、最初に一年生は飛ぶことができなかったけれど、みんなのサポートのおかげで、2回で跳べるようになった。一年生が頑張ったと思った。この班は、いい班だと思った。(C子)

中学年や下学年は、次のように班に語った。

- 「頑張れ」や「ドンマイ」の言葉をたくさん伝えられてよかった。(4年生)
- 褒めてもらって嬉しかった。(1年生)
- みんなで頑張って、全部のミッションをクリアできたので嬉しかった。(2年生)



写真3：縦割り班での振り返りの様子

活動前に、班のめあてを確認したことで、班のめあて達成のために、自分が心がける行動指針が明らかになったと考える。どの学年の子どもにも、活動中に意識的に慰めや励ましの言葉かけをしようとしている様子が見られるようになった。活動後に班のめあてを振り返ることで、自分が頑張ったことを自己評価したり、他者から褒めてもらって自信をつけたりする場面が低学年や中学年に保証されるようになっていった。低・中学年が自分も縦割り班の役に立っていることを実感できるようになり、班の友達に励ましの言葉をかけたり、協力的な態度を見せたりするといった貢献的な態度につながったと考える。

③ 縦割り班を活用した児童集会

縦割り班活動は、委員会活動や各種教育活動とタイアップして行ってきた。清掃活動については、別の集団で行っていたため、縦割り班で集まる活動はイベント的な活動のみだった。また、縦割り班で集まる機会が意図的に設定はされているものの、活動をする時期とそうでない時期があった。さらに、縦割り班活動の場面は、児童の創意工夫によって決定された「一年生を迎える会」と「チャレンジオリンピック」、「六年生を送る会」以外は、学校行事のように教師が意図的に縦割り班活動を組み込んでいるものが多かった。子どもたちの創意工夫によって縦割り班を活かした児童集会を実施している委員会は、9つある委員会のうち4つの委員会のみだった。

そこで、年間を通して、すべての委員会が児童集会を担当するようになると、児童の創意工夫によって縦割り班を活用した活動が計画される機会が増えるだけでなく、活動を通して自分たちの行動を振り返る機会が増え、年間を通して自分たち班集団の変化に、子ども自身が気付くことができるのではないかと考え、児童集会を表1のように割り振った。

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
変更前		体育委員会	健康委員会		環境委員会		図書委員会				
変更後	運営委員会	体育委員会	健康委員会	ボランティア委員会	環境委員会	広報委員会	図書委員会	運営委員会	給食委員会	健康委員会	情報委員会

表1 児童集会を実施する委員会と実施時期の修正

変更前は、児童集会を担当する委員会は、全校児童を対象として活動紹介や成果発表をするやり方が多かった。しかし、9つの委員会に児童集会を割り振ったところ、縦割り班を活用して、自分たちの活動を知ってもらおうとする集会を実施した委員会が3つ現れた。9月には環境委員会が「クリーン作戦」とタイアップさせて環境集会を開き、環境クイズを縦割り班で解いていく活動を実施した。1月には給食委員会が給食クイズを、2月には健康委員会が健康クイズを縦割り班で解いていく活動を実施した。いずれも、聞く一方の児童集会ではなく、参加型の児童集会へと変更してい

た。学校のヒーローである「ODB」の活躍に刺激を受け、高学年児童が「自分たちも活動を盛り上げたい。」「活動を工夫することで全校の仲をよくしたい。」と意欲を燃やし、縦割り班で解くクイズ形式の活動紹介を考えたり、劇で活動を紹介しようとしたりするようになった。

児童集会を各委員会が担当できるようにしたことで、高学年児童が「ODB」と同様に、「みんなが楽しく、仲よく活動すること」を目指し、児童集会に創意工夫をこらすようになった。これは、各委員会が全校に貢献しようとする意識を強くもった姿の現れと考えることができる。また、与えられた縦割り班活動の機会をやり過ごすのではなく、高学年の子どもたちが、自分たちの集会活動に縦割り班を活用し、意図的に縦割り班の成長につながる機会をもとうとするようになったと考えることができる。さらには、縦割り班活動の機会が増えることで、班のめあてを確認する機会が増え、低・中学年にとっても班の仲間から褒めてもらい、ますます、班のために頑張ろうという意識を高めることにつながっていったと考える。

5 全体のまとめと今後の課題

(1) 本研究の成果

- ・児童会キャラクターの存在によって、「ルールを守る」「周りのために頑張る」といった人の態度を素直に評価できる子どもを増やすことにつながった。
- ・「学校をより楽しく、仲良くする」という目的をもって誕生した「ODB」というキャラクターの登場によって、低・中学年の児童会活動に対する関心が高まり、一緒に活動を盛り上げたいという意欲を高めることができた。
- ・「ODB」という同級生の活躍によって、高学年の「自分の学校は自分たちでよくすることができる」という意識が高まり、一緒に活動を盛り上げたいという意欲を高めることができた。
- ・全校のヒーローとなった「ODB」による活動目的やルール説明は、低・中学年にとって受け入れやすいものとなり、目指す姿が明らかになって、児童会活動へのやる気を高めることができた。
- ・年間通じて、縦割り班活動の前に班のめあてや言動モデルを確認したことによって、自分が心がける行動指針が低・中学年にとって明確になった。
- ・年間通じて、縦割り班活動の後にめあての達成状況や取組の様子を振り返ったことによって、自分の行動を肯定的に評価してもらうことができる機会が増え、低・中学年が、集団の役に立っている実感を高めることができた。
- ・縦割り班活動のめあてや取組の様子を振り返る機会をたくさん経験することで、高学年が自分の班の変容に気づき、自分の班に愛着を感じ、肯定的な言動を班員に見せるようになった。
- ・児童会活動の企画者である運営委員会が、縦割り班活動で協力的な様子を見せるようになった全校児童の姿に学校のよさを見出し、自分たちの活動にやりがいと誇りを感じるようになった。

(2) 課題

低学年や中学年は、他から強制されなくとも、集団の規範に従うことはもとより、リーダーである6年生や「ODB」の指示に対しても、それを強制と受け止めることなく、集団の向上・発展のためとして受け入れるようになった。よきフォロアーの姿が育ってきたと判断できる。しかし、今回の低・中学年の変容を判断する材料としては、高学年や教職員から見る低・中学年の変容や行動観察といったものが多かった。低・中学年の内面では、実際にどのような変容があったかを明らかにすることはできなかった。今後は、低・中学年が外に見せる行動の変容を観察することに加えて、内面ではどのような変容があったかを作文シートや事前・事後アンケートの比較により明らかにすることで、集団の一員としての実感と自覚が高まる特別活動のあり方を検証していきたい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 東洋館出版社 2008 P5
 - 2) 矢野智司 『遊びのなかで育つ自主性』 金子書房 児童心理 2010 10月号 P23～28
 - 3) 滝 充 『「リーダー性」の土台となるもの』 金子書房 児童心理 2010 8月号 臨時増刊 P1～10
- ・南雲江利子 『児童の自主的・実践的態度の育成を目指す特別活動の取組』 上越教育大学学校教育実践研究センター 『教育実践研究第23集』 2013
 - ・新潟県教育庁義務教育課 『平成25年度新潟県小学校新教育課程研究集会資料』 2013